

1. 落語に親しんだ小中学校時代

- ・昭和30年代から40年代 落語ブーム
- ・テレビの普及 テレビ・タレントとして有名になる人 月の家円鏡、林家三平
- ・当時、私が好きだった落語家
 - 五代目柳家小さん 落語家初の人間国宝
 - 先代三遊亭圓楽 人情話が得意 小学生なのに好きだった。
 - 春風亭柳昇 新作落語 戦争体験 ひょうひょうとした語り口が好きだった。

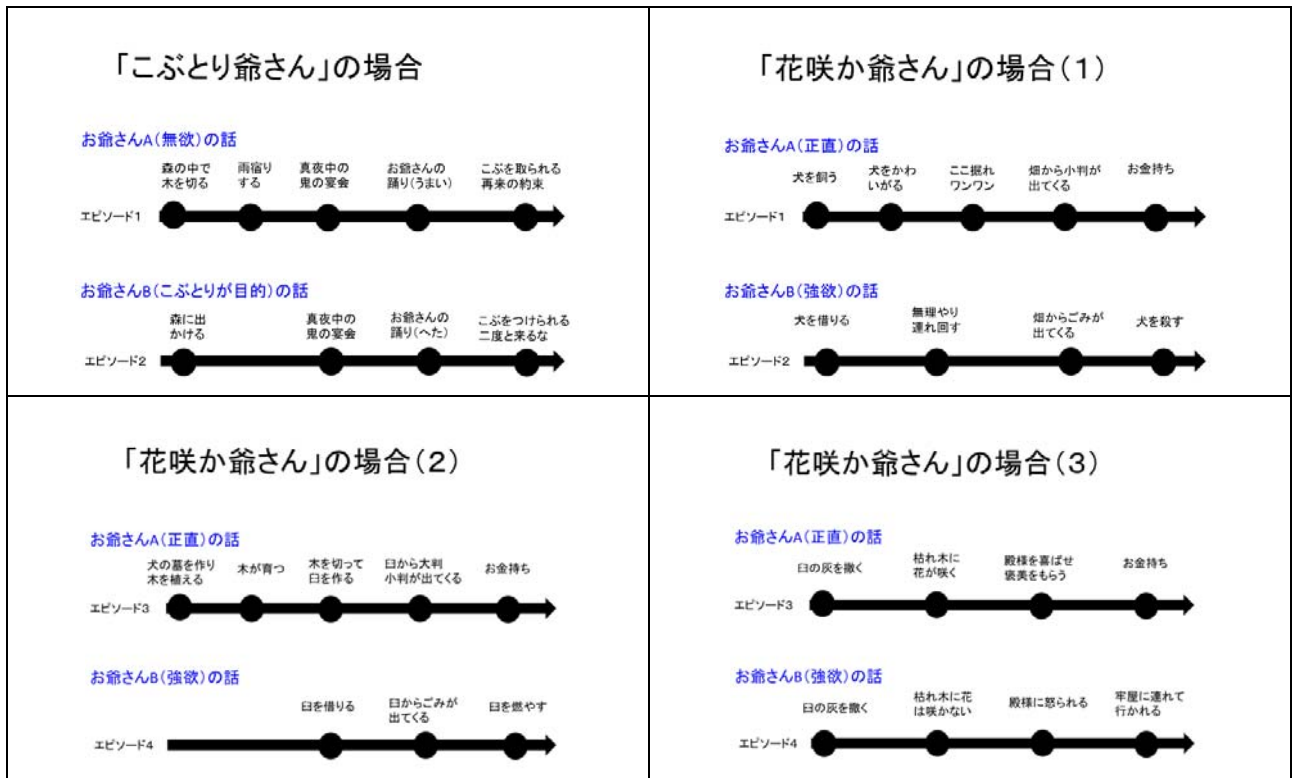
2. 米朝の「天狗裁き」との出会い

- ・大好きな落語 だけど、なぜ好きなのか、他人に説明できないことがもどかしい。
 - はじめて聞いたのはいつか覚えていない。
 - すたれていた古典落語を、三代目米朝が復活
 - 主人公 八五郎 長屋 寝ていたところを女房に起こされる
 - にやにやしていた 「どんな夢を見ていたのか」
 - 「見ていない」 → 夫婦喧嘩
 - 隣人が仲裁 「そんなくだらないことで喧嘩なんかするな」
 - 「どんな夢を見ていたのか」 → 「見ていない」 → 喧嘩
 - 長屋の大家が仲裁 → 奉行所 → 天狗

3. 日本昔話に見る「笑い」の原型

仮説1：笑いは、「繰り返し構造」の中の意外な展開にある。

- ・「こぶ取り爺さん」と「花咲か爺さん」の場合
 - 同じ構造のエピソードが繰り返されるが、ストーリーがずれていく。
 - ストーリーは意外な展開をするが、ポイントとなるセリフは同じものが繰り返される。



4. 落語に見る「繰り返し構造」

仮説2：笑いは、情報の共有を前提として、「繰り返し構造」の中の融通が利かないばかばかしさにある。

(意外性、言い間違い)

(1) 「時そば」の場合

- ・そばの代金 16 文を払うとき、
 - エピソード①「一、二、・・・、八」「今なんどき」「九刻」「十、十一、・・・、十六」
 - エピソード②「一、二、・・・、八」「今なんどき」「四刻」「五、六、・・・十六」
- ・意外な展開 得をした人のまねをするが、結果としてうまくいかず損をする。
 - ストーリーの展開の意外性
- ・前提となる情報の共有 九刻（深夜 0 時頃）、四刻（午後 10 時頃）
 - 主人公は、深夜 0 時まで待つことができず、午後 10 時頃に実行した。
- ・意外な展開だけでなく、誰もが知っている、前提となる情報を共有していることが重要

(2) 「子ほめ」の場合

- ・エピソード①主人公の八五郎は、物知りなご隠居からお世辞の言い方を教わる。
 - 45 歳の人を例に、「45 歳にしては、お若く見える。どう見ても 40 歳・・・」など
- ・エピソード②40 歳の人を相手に、「45 歳にしては、・・・」という。
- ・エピソード③友達の赤ちゃんを相手に、「1 歳にしてはお若く見える・・・」
- ・融通が利かないために、うまくいかず損をする。
- ・ストーリーの展開に意外性はないが、同じ言葉が、異なる状況で、異なる意味にとられる意外性
- ・前提となる情報の共有 褒め言葉のパターン

(3) 「青菜」の場合

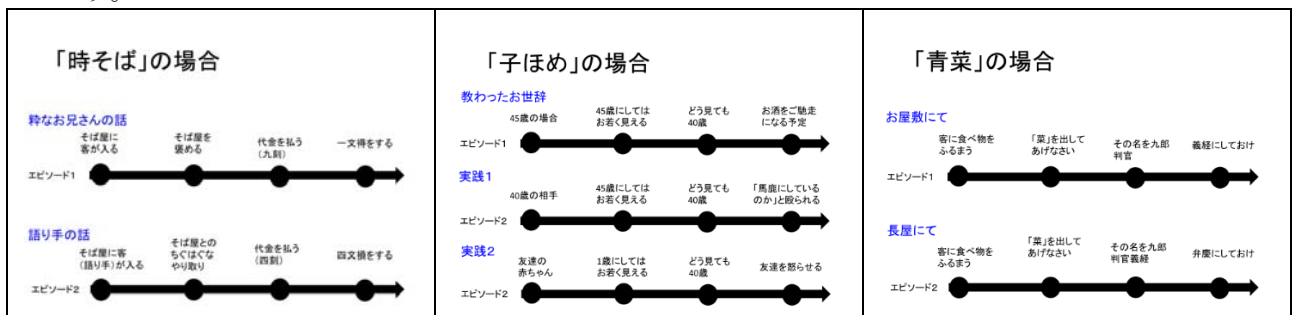
- ・エピソード①主人公の植木屋は、お屋敷の主人と奥方のやりとりに感心する。
 - 主人「植木屋さんに『菜』を出してあげなさい」
 - 奥方「鞍馬山から牛若丸が出でまして、その名を九郎判官」(菜を食らうて、ありません)
 - 主人「義経にしておきなさい」(よしとけ)
- ・エピソード②自宅の長屋で、友達を相手に実演する。
 - 植木屋「『菜』を出してあげなさい」
 - 女房「鞍馬山から牛若丸が出でまして、その名を九郎判官義経」
 - 主人「弁慶にしておきなさい」
- ・状況が違うのに、決められてセリフをそのまま言おうとするが、言い間違える。
- ・前提となる情報の共有 平家物語、源平盛衰記など

*私は、このおかみさんが大好きだ。

頼りない旦那に、しっかり者のおかみさんというパターン

文句を言いながら、旦那の遊びにつき合う。

狭い押入れの中で、汗びっしょりになって、真っ赤な顔をして出てくる。なんてかわいいんだろう。



5. 古典落語の「笑い」

- ・はじめて聞いたとき「笑い」

情報の共有を前提とし、意外性（ストーリー展開、状況による言葉の意味の変化）で説明できる。

- ・2回目以降の「笑い」の解釈

意外性だけでは、説明できない。

ストーリー展開の予見性をどのように回避するか？

名人の話に引き込まれ、一瞬、繰り返しの結末を忘れる。

「さげ」を聞いて、「ああ、そうだった」と思わせる。

「ああ、そうだった」は、脳に快感を引き起こす。

例) 私は、毎日寝る前に小説を読む。枕元にはいつも4~5冊置いておいて、その日の気分で選びながら、同時進行で読む。時々、途中まで読んで、数ヶ月放置する小説もある。そんな小説を途中から読み始めると、ストーリーや登場人物を忘れてしまっていることがある。しかし、あえて読み返さずに我慢して読み進めると、それまで忘れていたストーリーや登場人物がサーッとよみがえる瞬間がある。おそらく、快感ホルモンであるドーパミンが脳内で分泌されているとことだろう。

6. 「天狗裁き」の不思議

仮説3：笑いは、「繰り返し構造」自体に内蔵されている。

- ・仮説1、2では、説明できない疑問点

意外なストーリーの展開はない。

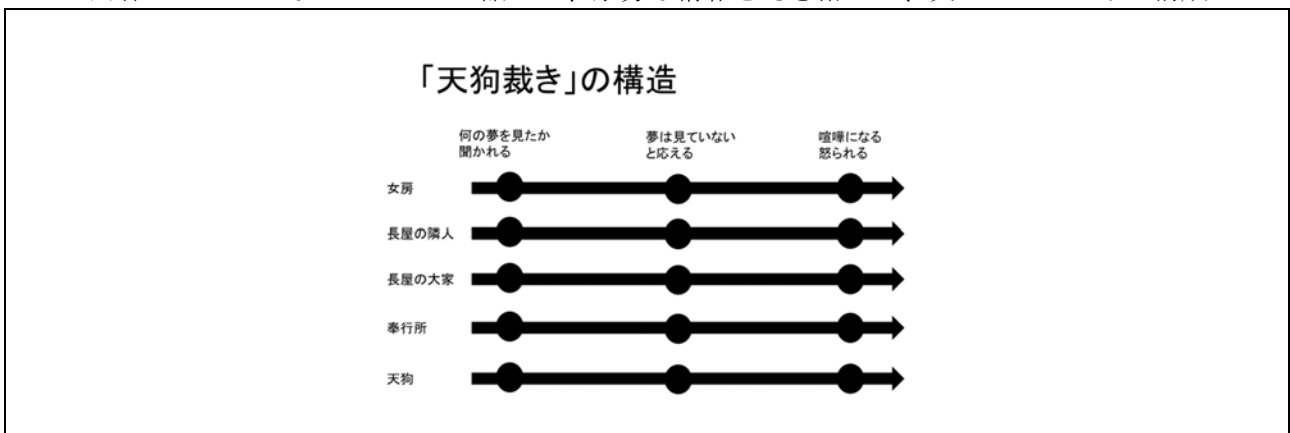
言葉の意味の変化はない。

前提となる情報の共有を必要としない。

予見性を回避するほど、引き込まれる内容がない。

むしろ「予見」どおりのセリフが繰り返される。

内容がほとんどないナンセンス話だが、余分な情報をそぎ落とし、笑いのツボだけで構成



7. 進化心理学から見た「笑い」

- ・表情の起源 最初は、危険に対する反射的な動き（逃避、反撃など）として進化

その後、意思表示などコミュニケーションのツールとして進化

- ・笑いの表情の起源 笑うための筋肉の動き＝有害なものを吐き出す表情（自分の身を守る防衛反応）

→驚いた時、「危険のシグナル」を発する意味を持つようになる。

→その後、「劣位の表情」を経て、「社交上の笑い」の意味を持つようになる。

→「笑い」の表情は、相手に敵意がないことを示すようになる。（親和の表情）

→その後、「遊びの笑い」、「快の笑い」に進化した。

- ・笑いの表情を作るプログラムは、ある刺激に対する無意識の反応として遺伝子に組み込まれている。

ヒトの赤ちゃんでは、「快の笑い」が先（先天的）、「社交上の笑い」が後（後天的）

- ・進化から見た笑いの分類

不随意の笑い（本能的） 快楽充足、快楽予期、少しの驚き、発見

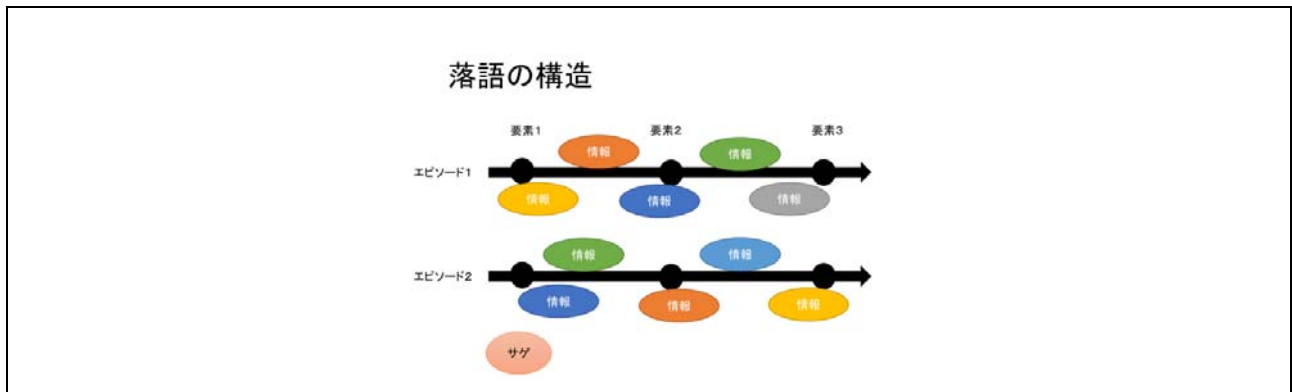
随意の笑い（社会的） あいさつ、軽蔑、冷笑、優越、追従、攻撃、防衛

- ・面白いから笑うか、笑うから面白いか（怒るから殴るのか、殴るから怒るのか）
繰り返す構造→予見可能→安心・安全→笑いの表情→筋肉の動き→快の感情誘発→「笑い」
- ・単純接触効果
何度も見たり、聞いたりすると好感度が高まる効果。
例）コマーシャル、水戸黄門、吉本新喜劇など

8. まとめ

仮説3(発展): 落語の「繰り返し構造」は、ヒトの進化に刻まれた「笑いの表情」を誘発することにより「笑い」を生み出す。

- ・落語の「繰り返し構造」は、ヒトの進化に刻まれた「笑いの表情」を誘発することにより「笑い」を生み出す
- ・繰り返す構造→予見可能→安心・安全→笑いの表情→筋肉の動き→快の感情誘発→「笑い」
- ・情報は、落語に彩りや奥行きを与える。
- ・「サゲ」は、落語が作る架空の世界から現実の世界連れ戻す役割がある



9. 実存と構造

(1) 実存主義

- ・人間は、まず先に実存し、自分の本質は、その後で自分自身で作る。
- ・封建的社会からの「開放」
60～70年代 「ラブ&ピース」の世代 伝統的なしがらみからの開放
「ナンバー1でなくてもいい、オンリー1でいい」
しかし、「オンリー1」は、孤独に耐えなければならない。
- ・「人間は、自由の刑に処せられている」（サルトル）

(2) 構造主義

- ・人間は、家族や地域社会の構造の中で形成される。
繰り返す構造による、問題の相対化 → 独りじゃない → 「救い」
- ・落語は「救い」「サゲ」で現実世界に戻っていく。
- ・「救い」が、笑いの効用に関係 免疫の活性化 がんの予防と治療
ストレス解消 感情の爆発を防ぐ安全弁 「泣き・笑い」